

平成 29 年度(2017 年度)

日本特別活動学会 第 4 回 実践事例募集事業

推 奨 事 例

事例番号 4-6

一年生の特別活動を通じた学級づくり

広島県坂町立坂小学校 山本 耕 祐

実践テーマ	1年生の特別活動を通じた学級づくり
実践区分 ○囲み	<u>学級活動・ホームルーム活動</u> 児童会・生徒会活動 クラブ活動 学校行事 その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	1年生の段階から折り合いをつけたり、めあてに向かう子どもたちを育てた。中学年や高学年になったときに実を結ぶと考え、ワラスの子どもたちの実態に合わせてながら、できる限りの実践を試みた。
実践の時期	平成 29 年 4 月 ~ 平成 30 年 2 月

1年生の特別活動を通じた学級づくり

広島県安芸郡坂町立坂小学校

山本 耕祐

1 はじめに

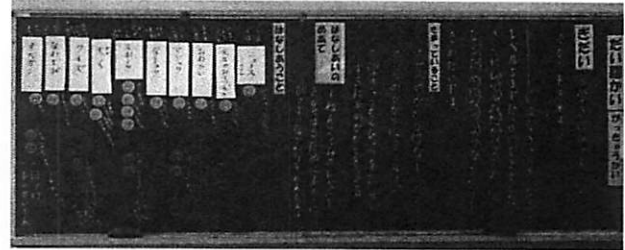
入門期から折り合いをつける行動や、めあてを意識した子どもを育てたいと願い、1年生でどこまで特別活動を通して学級づくりができるか、1年間取り組んだ。その内容を以下に述べたいと思う。

※1

2 学活(1)に関わる実践について

○学級会

※1のように反対意見の理由を板書し、まとめる段階で、反対意見を唱えた子にどうやったら条件付き賛成になるか聞くことで、折り合うことができた。



2月末までの学級会を通して、※2のような学級会忍法を“まとめる”場面で使ってきた。しかし、学級会の場面だけでは児童たちが折り合う力を身に付けることはできないと考え、普段の生活場面で※2の術が使えたらシールを貼ることにした。すると、放課後友だちと遊ぶ場面などでも使うようになった。児童がある程度※1の術に習熟したら、※3のようなそれまで教師が決めていた当番の仕事を、児童たちの話し合いに任せるようにした。児童は、「持ち越しの術を使って、今週は譲るから来週は僕がこれをやらせてね。」など折り合う声が聞こえるようになった。

※2



○学級会グッズ

1年生の実態として、話し合いの流れを意識することは難しいので、焦点化するために※4のような写真立てを活用した枠を作った。しかし、はみ出すこともあったので※5のようなプラスチックで作った伸縮する枠を作ると、1年生の児童でも焦点化した話し合いができた。

※3



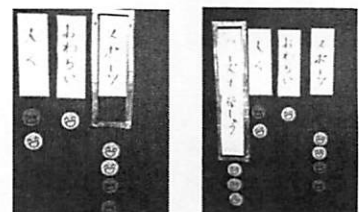
○議題箱

普段から「授業は先生が創るが、クラスは君たちが創る」ということを言い聞かせ、※6のような提案カードを※7の議題箱に入れるように促した。すると、1年生でもクラスをよりよくしようという目で行動できるようになり、毎日議題箱の中は提案で溢れるようになった。低学年という実態を考え、教師からコメントがあった方が意欲に結びつくと考え、「せんせいのおへんじ」欄を設けた。

※4



※5



「1年生のトイレをみんなで綺麗に使いたい。」という学級をまたがることについては、ポスターをトイレに貼るという意見に落ち着いた。また、

「あいさつ団を作って、あいさつを広げたい」といった全校に繋がっていき提案は、まずはクラスの前で自分達が取り組み、次に委員会と連携してあいさつ運動に取り組んでいくこととなった。

○係活動

1年生は朝の会で各係の案内をしてもすぐに忘れてしまう。そこで※8のようなボードを作り、児童がその週に何があるのか視覚的に支援するようにした。また、帰りの会では、係の企画に参加した児童に、楽しかったか4段階で挙手の評価をしてもらうようにした。楽しくなかったと評価した1や2の児童にその理由を聞くことで、次回に向けての改善をすることができた。

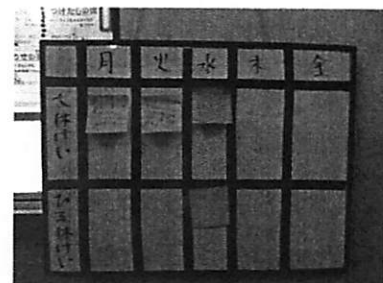
※6



※7



※8



3 学活(2)に関わる実践について

○学級目標

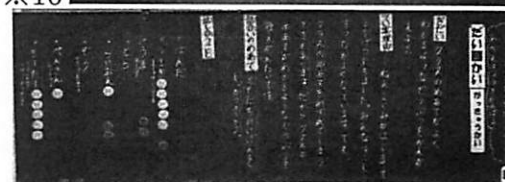
1年生の実態を考え、どんなクラスにしたいか口頭で児童に聞き4月半ばに教師から学級目標を提示した。※9のようにクラスの中で目標に合った行動ができたならシールを貼り、目標とは反対の行動が多く見られた場合、シールを剥がすようにした。

しかし、入門期の児童にとって学級目標をイメージするのは難しく、※10のような学級会で学級目標がイメージできるような動物を決めた。すると、学級目標に関わる具体的な行動ができるようになった。特にチーターのように素早く行動というイメージを持ったことにより、チャイムが鳴るとすぐに授業を始めようとするようになった。

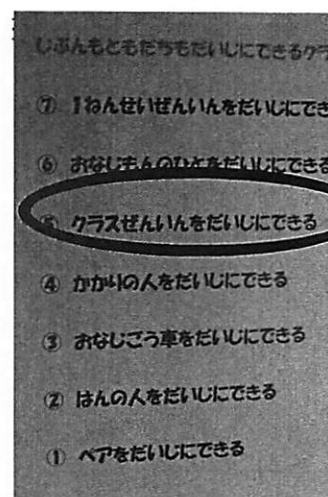
※9



※10



このように、児童は学級目標を意識して行動するようになったが、より学級目標を意識した行動を促すために、2学期に入り※11のようなループリックを子どもたちと一緒に考えた。このループリックで自分達が今、どのレベルなのか話し合うことが、自分達の学級の状態を捉える上で有効だった。「班での話し合いのときに、きちんと聞いてくれない人がいるからレベル2だ。」や「後ろからプリントを集めるときに乱暴に集めているからレベル3だ。」というような課題が出た。ほぼ全員の児童が、クラス全員を大事にできるところまではいっていないが、他のレベルは達成していると捉えていたので、レベル5からスタートした。その後、クラス全員を大事にするためには男女の仲をもっと深める必要があるので、男の子と女の子が仲良くなるようなお楽しみ会がしたいという提案が2学期末に議題箱の中に入り、お楽しみ会をすることとなった。1月末からは、「レベル5は達成し

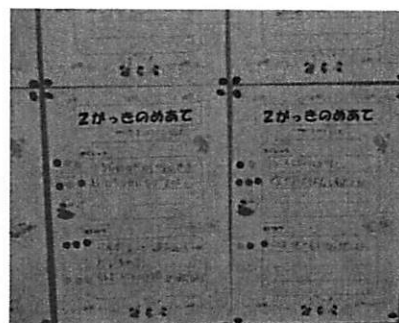


たので、さらにレベルを上げるために、1年生全体での会をしたい。」という提案がなされたので、それに向けて計画をしている。

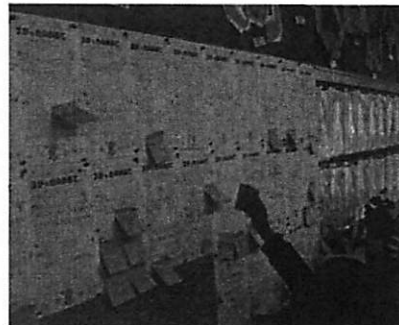
次に、個人の目標については※12のように学期ごとのめあてを作った。その際に気をつけたことが3つあった。1つ目は、めあてを達成するまでの期限を考えることである。このことにより、「2月までに逆上がりができなきゃいけないから、今よりもうちょっと頑張らないと。」といったように見通しを持って取り組めるようになった。2つ目は、難しい目標であった場合、易しくしたいいくつかの目標に細分化することである。スモールステップでクリアしていくことにより、困難な目標が達成可能となった。3つ目は、具体的な数値を入れることである。「自主勉強5ページする。」といった数値を入れることで、達成目標が分かりやすくなった。

個人の目標の評価は、最初※12のように、1週間に1回教師と子どもが相談して、よくできていたら青、まあまあだったら黄色、できていなかったら赤というようにしていた。しかし、この方法では大変時間がかかった。そこで、“おうえんがっせん”を実施した。これは、それぞれが自分の目標をクラスの前で宣言し、それを聞いた児童は友だちの目標を覚え、できていたら※13のように付箋にそのことを褒めて応援する内容を書き、友だちのめあての上に貼っていくものである。これにより、友だちからの“おうえん”を受けて、自分のめあてを達成する児童が続々と現れるようになった。

※12



※13



4 成果と課題

○成果

- ・1年生でも自分の学級をよりよくしようという目を持つことができ、アンケートからほぼ全ての児童が自分達が学級を創っているという意識を持つことができた。
- ・学級目標のルーブリックを作ったことにより、子どもたちが次のレベルを目指して自ら課題を解決しようとし、よりよいクラスにしようとして行動するようになった。
- ・“おうえんがっせん”により、自分のめあてを達成しようと、長期間頑張る児童が増えた。
- ・1年生でも学級づくりに特別活動は大変有効であることが分かった。

○課題

- ・司会グループの能力をもっと伸ばす指導ができていなかった。
- ・同学年にあまり実践を広げることができなかった。

参考文献

大前暁政 子どもを自立へと導く学級経営ピラミッド 2015年
文溪堂 道徳と特別活動 2017年4月号～2018年2月号